

4 台湾乳がん女性患者の生きがい意識

：フランクフルト思想による分析

○蔡 小瑛（関西福祉大学）

I. はじめに

欧米の個人主義から見ると各個人の独立性が欠けている東アジア文化圏であるが、この文化圏では共同体の中での相互扶助の原理が生かされている文化の現状を重要視して、看護活動に取り入れるべきと発表者は提言してきた（蔡2007）。したがって、今後は日本、台湾、韓国を含めた東アジア文化圏に適した乳がんに関する治療体制はもとより、伝統文化に適した看護援助の開発がますます必要とされよう。発表者は台湾をはじめ東アジア文化圏の女性乳がん患者のニーズに即した看護援助に着目してきた。これまでに、台湾乳がん患者は家族や親戚、そして身内に近い友人による支えがソーシャル・サポート全体に占める割合が最も大きいことが明らかとなった（Ogawa, et al., 2008）。また、病を持つ一人の個人よりも、家族に生かされている自己概念が著しく、台湾乳がん患者は闘病に伴う生活の変化から、それまでに気付いていなかった家族内における自己の役割を認識した。それは、家族内において、「娘としての自分」、「妻としての自分」及び「母としての自分」であった（蔡2009）。そして、上記の研究に引き続き、本発表は2名の事例をもちいて、台湾女性乳がん患者の生きがい意識をフランクフルト思想による分析を行ったものである。

II. 研究方法

2008年8月から2009年1月にかけて、50歳代の台湾女性乳がん患者2名を研究対象とした。プライバシー保持できる個室に於いて半構成質問内容を用いて、1名約30分の個別面接を行った。インタビューは研究対象者の承認を得た上で、テープレコーダーに録音し、逐語録を作成した。乳がんと告知されて以後の心境とその変化、家庭における自分の役割とその変化及家族や職場など周りの人々の反応に関する、半構成的質問内容とした。得られたデータの分析は、1969年に Van Kaamによって考案された心理現象学的方法（psychophenomenology）を用いた。本研究は関西福祉大学看護学部研究倫理審査の承認を受けた。

III. 結果

研究対象者は、「家を支えてきた」、「姑の世話をしてきた」（既婚者である事例1）、「自分が死んだら、親のめんどう誰が見るか最も心配」（未婚者である事例2）とのように、乳がんと告知されて以来2名とも自分の存在価値を自分以外の他者に置いている傾向が見られた。

IV. 結論

生きがいの問題を根本的に考える際、精神科医かつ心理学者であるフランクフルトにいわく「人生の意味についての問いの観点の転回」から重要な示唆が与えられた（山田1999）。自分以外のものから自分の存在価値が見られた上記の台湾乳がん患者の生きがい意識そのものが「観点の転回」の大切な過程であると思われた。本研究は今後東アジア文化圏の女性乳がん患者の実存的な成長を援助するにあたって、重要な基礎資料となろう